

文化遺産 ニュース

Cultural Heritage News

March 2008

Vol. **18**

From NARA

◎文化遺産ワークショップ(カンボジア)

◎研修レポート

集団研修・個人研修・ユネスコ青年交流信託基金事業

◎国際会議・国際シンポジウム

◎第25回イクロム総会へ出席

◎インターナショナル・コレスポンデントからの報告



カンボジア バンテアイ・スレイ

カンボジアで文化遺産ワークショップを開催



全体記念写真



アプサラとの協定書締結

これまでACCUS奈良事務所では、アジア太平洋地域の国々から研修生を日本に招いて研修事業を展開してきましたが、今年（2007年）度から、これらの国々の現地に講師団を派遣して研修を行う「文化遺産ワークショップ」事業をはじめました。

国外の現地で行う文化遺産保護のための研修には、いくつかの利点があります。まず、一カ国で大勢の人たちが一緒に研修参加できることです。それと、現地の言語で研修を行うことができ、そのため、英語を話せない人でも参加できます（日本国内での研修は英語で行っています）。加えて、建物や考古遺物など、教材とする文化遺産に現地のもので利用することができます。はじめて日本に来て、あまり馴染みのないものを教材にするよりは、親しみもてるでしょう。

さて今回第1回目のワークショップは、2007年10月22日から26日まで、カンボジアのシエムリアップで開催しました。ご存じのようにシエムリアップには有名な世界遺産アンコール遺跡

群がありますが、このワークショップには、その遺跡の調査や保護に携わる「アンコール地域遺跡保護整備局（アプサラ）」の若手研究員15名が参加しました。研修プログラムは、考古遺物の記録法（実測と写真撮影）です。

冒頭、西村康ACCUS奈良事務所長とブン・ナリットアプサラ総裁が、ワークショップ開催に関する了解書に署名し、事業成功に向けて相互協力を約しました。

研修講師は、三好美穂さん（奈良市教育委員会）、近江俊秀さん（檀原考古学研究所）、佐藤由似さん・杉本和樹さん（奈良文化財研究所）という陣容です。各講師の皆さんの講義と実技指導をもとに、研修生一同、地元アンコール遺跡から出土した土器や瓦を教材にして、実測・拓本・写真撮影に取り組みました。写真の研修では、地元で容易に調達できる材料で組み立てられる簡易撮影台の製作法まで伝授する念の入りようで、好評を博しました。

実質5日間という短期間でしたが、参加者の多くにとっては、はじめての



遺物写真撮影実習の様子



土器実測研修の様子



瓦実測研修の様子

貴重な体験だったようです。閉講式では、研修生を代表してスラン・テックさんが挨拶してくれましたが、皆さん異口同音に、もう少し長期の研修あるいは再度の研修開催を希望してくれました。はじめにしては、双方手応えがあったものと安堵しています。研修参加された皆さんの今後の仕事に役だててもらえれば、というのがACCUS奈良事務所の願いです。

ACCUCO奈良事務所では、文化遺産の保護に携わるアジア太平洋地域の人材養成を目的に、2000年度から、さまざまな研修事業を展開しています。「文化遺産ニュース」の月号では、2007年度に実施した研修について、紹介します。

集団研修



旧田中家住宅での実習

集団研修は、当事務所の研修の中で最も規模の大きいものです。木造建造物と考古遺跡を、隔年で交互に取り上げて実施しています。2007年度は、9月18日から10月19日まで、「木造建造物の保存と修復」をテーマに行いました。14か国(カンボジア・中国・インドネシア・イラン・ラオス・ミャンマー・ネパール・ニュージーランド・パキスタン・フィリピン・サモア・スリランカ・タイ・ベトナム)から14名が参加しました。

研修生にとって世界遺産「法隆寺地域の仏教建造物」や「古都奈良の文化財」をはじめ歴史的な木造建造物が多数あり、古くから日々その保護継承に努力を重ねてきた奈良の地での、こうした研修は、意義深いものです。

研修の内容は、「日本の文化遺産保護制度」や「日本の木造建築概論」あるいは「木造建造物の虫害について」などの講義をはじめ、研修生各自が持ち寄った自国の文化遺産保護の実情と課題についての発表・討議など、多様で

した。プログラムの初めと終わりには、研修の共催者であるイクロム(文化財保存修復研究国際センター・文化遺産保護の推進のため1959年にロームに設立された政府機関)からも講師を招き、活発な質疑応答を行いました。また、実習習得のための実習もありました。今回は、奈良市五条町にある旧田中家住宅を教材にして、実測図の作成方法や、修理方針の策定方法などについて学びました。加えて、見聞を広めるため、愛知県の明治村、岐阜県の白川村と高山市を訪れ、木造建造物の保存修復と活用の実例に触れました。



集団研修全体記念写真

個人研修

個人研修は、当該国の文化遺産保護の実情に応じて、参加者が最も必要とする課題に従ってプログラムを設定して行います。ですから、特定の内容について、集中して深く掘り下げることができるといってもリットがあります。2007年度はベトナムから3名、モルジブから2名の研修生を招きました。

ベトナム
(研修期間／8月28日～9月27日)



麻生寺大師堂の保存修理工事現場での研修

ハタイ省文化遺産管理事務所からリエンさん、ドゥオンラム村文化遺産管理事務所からナムさんとアンさんが参加しました。皆さんは、ハタイ省ドゥオンラム村の保護事業に携わっています。ドゥオンラム村は、首都ハノイの西約50kmにあり、ベトナム北部の代表的な農村の様子を今に伝えています。ベトナム政府もその保護に積極的になり出し、世界遺産登録も検討しているよう



ベトナム研修生の皆さん

です。ただし現地では、集落の建物を調査修復し、維持管理していくために必要な専門の人材が十分ではありません。研修では、建物の調査に必要な基本知識や技術を習得するだけでなく、町並みや集落の保護に必要なさまざまなノウハウについても、実例に触れ、広く学びました。なかでも、世界遺産の白川村や、奈良県橿原市今井町、岐阜県高山市、埼玉県川越市、群馬県六合村などの伝統的な建物群の視察は印象的だったようで、本国のドゥオンラム村でも参考にしたいことが山ほどあると話していました。

研修期間の終盤には、昭和女子大学(東京)で開催された国際シンポジウムに、パネラーとして出席し、ドゥオンラム村の保護の実情や課題などについて事例報告し、多くの日本の専門家と意見交換する有意義な場をもちました。

研修期間の終盤には、昭和女子大学(東京)で開催された国際シンポジウムに、パネラーとして出席し、ドゥオンラム村の保護の実情や課題などについて事例報告し、多くの日本の専門家と意見交換する有意義な場をもちました。

モルジブ

(研修期間／11月26日～12月21日)

国立言語・歴史センターから、ハフィズさんとフィクリーさんが参加しまし



モルジブ研修生の皆さん



元興寺文化財研究所での研修

ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業

「文化遺産保護青年指導者研修・交流プログラム」



全体記念写真

ユネスコからの同基金で実施するこの研修の大きな目的は、各国で文化遺産保護施策の企画立案に携わる若手の養成に貢献することです。従って、研修参加者の主な顔ぶれが、個別の技術系専門分野の人たちでなく、企画部門を主とした行政に関与する人たちであることが特色になっています。

2007年度は、11月12日から11月22日まで開催したこの研修に、9か国（バングラデシュ・カンボジア・中国・ラオス・マレーシア諸島・ミクロネシア・フィリピン・ウズベキスタン・ベトナム）から9名が参加しました。

研修は大きく3種類のメニューで構成されています。ひとつは講義です。西村康ACCU奈良事務所長による「日本の文化遺産保護制度」などを受講しました。二つ目は、奈良や京都の世

界遺産登録地を実際に訪れて、文化遺産保護のあり方について考えることです。今回は法隆寺・平城宮跡と、京都の二条城・金閣寺を視察しました。

三つ目は、ACCU奈良事務所の他の研修にはない大きな特徴ですが、文化遺産保護に携わる専門家だけでなく、地域の大学生・高校生や住民の方々と交流し、相互理解を深める機会を経験することです。奈良大学や京都ノートルダム女子大学の学生さんたちとの意見交換会を行いました。また奈良市立二条高校の生徒さんたちと平城宮跡を会場に活発な交流が行われました。こうした出会いをきっかけにして、交流できた皆さんの間で、これからも情報交換や相互理解が進展することを願っています。



一条高校の生徒との交流



奈良大学生との意見交換

国際会議・国際シンポジウム



国際会議

国際会議「文化遺産の危機管理Ⅱ」 自然災害への備えを考える

ACCUN奈良事務所では昨年(2006年)度から、「文化遺産の危機管理」をテーマにした国際会議を継続することになりましたが、今回、第2回目となる会議を、2008年1月16日から18日まで、奈良県新公会堂で開催しました。

昨年(第1回目)の会議では、アジア太平洋地域でのさまざまな文化遺産への危機について、網羅的に概観してきました。それを通じて、同地域では、とりわけ自然災害による文化遺産への危機が深刻である実情がクローズアップされたのです。そこで今回の会議では、文化遺産保護のための自然災害への備えに焦点を絞り、最近の代表的事例をもとに議論することになりました。

まず会議冒頭に、花里利さん(三重大学)から「地震国の文化遺産にみる耐震性能と構造修復」、ジョセフ・キングさん(イクロム)から「文化遺産防災対策の国際的動向」と題した基調報告がありました。次いで国内外の専門家の皆さんが、文化遺産建造物の耐震対策や構造補強などの実例について事例報告を行いました。また、中部ジャワ地震によるインドネシアのプランバナン寺院をはじめ文化遺産への被害や、バキスタンのラホール城やシャーリマール庭園での自然災害対策など、最新の実情を知ることができました。また、イクロムのムニール・シュナキ所長が「文化遺産危機管理にかかるイクロムの取り組み」について特別報告がありました。

これら報告を受けての総括討議では、国々あるいは地域社会が代々継承されてきた、自然災害への備えの伝統的な知恵の再評価をめぐる話題が大きく取り上げられたことが印象的でした。今回の会議では、話題にあがったこうした問題について、さらに掘り下げた議論が期待されます。



パネルディスカッション

国際シンポジウム「地震・雷・火事・津波」 突然に襲い来る危機から文化遺産をどう守る

2008年1月19日に奈良県新公会堂の能楽ホールで開催したこのシンポジウムは、先の国際会議の内容と成果を、広く皆さんにわかり易くお伝えするための企画です。

春日大社権宮司の岡本彰夫さんによる「春日大社の文化と技術の伝承」先人達の知恵に学ぶ」と題した基調講演のち、アディシヤクティさん(インドネシア・バンドルさん(バキスタン)に、両国で最近あった文化遺産への自然災害について紹介いただきました。

後半は、立命館大学歴史都市防災研究センターの益田兼房さんをコーディネーターに迎え、全員でのパネルディスカッションです。先人の知恵の継承で守り伝えられた春日大社の話に、パネラーの皆さん、感銘を受けたのでしょうか。ここでも、伝統的な知恵や技術をめぐって意見が交わされ、会場も聞き入っていました。



国際シンポジウム



アウグストゥス帝廟=アラパチスのレリーフ



イクロム建物



エクスカーションで見たアウグストゥス帝廟=アラパチス遺跡模型

第25回

イクロム総会へ出席

イクロム(文化財保存修復研究国際センター=ICCRORM※1)は1956年にユネスコが各国からの分担金と寄付をもとに運営する政府間組織(IGO)として、世界の文化財保存のために専門家を養成、情報収集と提供、それを通しての啓発を目的に創設したもので、1956年からローマで活動を開始しました。わが国からも文化庁文化財部の調査官が職員として派遣されています。

このイクロムの第25回総会が2007年10月に開催され、日本からは代表団が文化庁より送られました。他にイクロムの評議委員会(Council)のメンバーである筑波大学の大和智教授とACCUN奈良事務所の西村所長が出席しました。なお、イクロムの加盟国は総会の時点で123カ国あり、その内の90カ国が出席していました。総会の会場となったのはローマの国連食料農業機関(FAO※2)で、ここは国連の機関とあって警戒が厳重でした。

今回は第25回総会ということでしたが、創立50周年でもあり開会式でのユネスコの世界遺産センター長フランチェスコ・バンダリン氏とイクロムのプシユナキ所長の挨拶では、歴史的な事柄を多く取り上げていました。他にイタリア政府やローマ市からの来賓挨拶が多くありました。議事はイタリア語、フランス語、スペイン語それに英語の同時通訳で進められましたが、当初予定されていた項目は、準備や手続きの遅れから順不同となってしまいました。

開会式の直後には表彰式がありました。表彰されたのは日本人の元東京



会議の様子-表彰式

教授が代理で受領して謝辞を代読しました。

次いで資格審査委員会(Credentia Committee)より加盟国の分担金に関する報告、イクロムの建物庁舎の移転計画の報告、プシユナキ所長によるイクロムの活動に功績のあった物故者の紹介と黙祷、評議委員会(Council)よりの報告と進行しました。

議題としては最も重要な事項に予算(案)がありますが、イクロムでは2年間の会計年度です。今回は所長よりゼロ成長を実現すべく努力する旨が表明されました。緊縮財政に波は世界中をおおっていると実感しました。インターンシップは削減するが、サウインドイメージやCollaiaあるいは南米へ対する援助などは増加させるといように、適切に配分して支出の削減を図るが、人件費の伸びを2.5%と見込まないといけない、など報告されました。ゼロ成長については、日本、チェコ、ドイツ、アメリカなどが賛成しましたが、マルタ代表が支持するのは大国のみだと不満を表明しました。分担金はアメリカ、日本、ドイツで全体の半分をまか

文化財研究所員の増田勝彦氏で、長年にわたる紙の修復に関わる研修への貢献が認められたからです。ご本人は正倉院で紙の調査をしているということで、大和

なっているのが現実でもあります。最後に各国代表より主としてイクロムへの感謝の言葉などステートメントが述べられました。30カ国をこえる件数がありました。これの終了後、オブザーバーにも発言の機会が与えられ、西村所長がACCUN奈良事務所の活動について紹介しました。その後、選挙管理委員会より今回改選された評議委員会の新メンバー発表があり、大和智教授も再任されました。再任されたメンバーには中国の呂舟氏(精華大学)もいました。



会場の屋上から見た市内



イクロム総会会場(FAO建物)

※1 ICCROM: International Centre for the Study of the Preservation and Restoration of Cultural Property

※2 FAO: FOOD AND AGRICULTURE ORGANIZATION OF THE UNITED NATIONS

インターナショナル・コレスポンデントからの報告



ソ・サイ窯跡の発掘調査

今年度から、これまでにACCUCU奈良事務所
で研修を受けられた方の中から「インターナ
ショナル・コレスポンデント」を任命し、アジア・
太平洋諸国の状況報告などを行っていただく
事業を開始しました。今回は、2006年度
の集団研修参加者のカンボジア・アンコール地
域遺跡保護整備局(アプサラ)研究員のスラン
テックさんに、アンコール遺跡群(保護区)の近
況を報告していただきます。

日本は長きにわたり、カンボジアの経
済開発における代表的なパートナーで
あり、またカンボジアの文化遺産の保
護に協力し、アンコール遺跡のユネスコ
世界遺産への登録についての支援も行っ
てきました。これからご紹介するのは、
カンボジア王国アプサラ当局との協力
のもと、シエムリアップ・アンコール地域に
おける調査、保存、修復プロジェクトに
積極的に携わってきた日本の研究機関
の動向です。

1 奈良文化財研究所

奈良文化財研究所はアンコール地域に
おいて、上智大学研究教育センター、アプ
サラ当局との共同作業を行いました。プ
ロジェクトの主要目的は、1994年か
ら2003年までのタニ村窯跡の発掘で
す。アプサラ当局は、このタニ村を遺跡公
園にする計画を立てており、見学ルー
トや駐車場、情報センター、クメールの伝統
料理を出すレストラン、陶磁器の複製工
房などを配置し、窯跡には遺跡博物館
の建設を進めています。さらに同研究所



西トップ寺院の平面図

はソ・サイ窯跡やクナ・ポー窯跡など、
他の窯跡についても、構造の解明を目指し
た調査を実施しています。
2003年から同研究所は、西トップ
寺院(アンコールワット遺跡群)での新規の
調査活動に着手しています。この活動の
目的は、同寺院の東側テラスの創建年代、
構造様式・歴史の変遷について研究を深
めることにあり、近い将来同寺院が修復
される際には、研究成果が利用されるこ
とになるでしょう。

またアンコール地域での調査以外にも、
カンダラ州ポニアルにある17世紀の日本
人村に関する、文化芸術省との共同研
究を実施しています。研究の成果について
は、2008年2月13日、ブノンベンのカン
ボジア—日本文化交流センターにおい
て、日本大使館が企画した会合で、同研
究所飛鳥資料館学芸室長の杉山洋氏に
よって発表されました。発掘調査によつて
海外交易の拠点となる港を発見したとい
うことですが、このことは、あるオランダ
人の日記に、かつてここに運河(ジャパニ
ズリバーと呼ばれた)日本人村があったと
記されている内容と一致しています。
毎年、同研究所は、王立芸術大学の考
古学部の学生中から数名を選出し、シエ
ムリアップで行う発掘調査に参加させて
調査方法を指導し、また、日本での研修
にも参加させています。

2 上智大学アンコール遺跡 国際調査団

同調査団は1989年からアンコール
遺跡で活動を行っています。2007年、
アンコールワット寺院の西参道の修復作業
の第二段階が終了しました。2007年
11月3日、修復作業の完了を記念する式
典が開催され、閣僚会議議長でありアプ

サラ代表でもあるソカーン副総理が司
会を務めました。
このほかにも1991年から、同調査
団はバンテアイ・クデイ寺院における調査
と保存の活動を行っています。バンテアイ
クデイ寺院では発掘作業中に274体の
仏像が見つかりました。

上智大学はアンコール地域に、「ブレア
ノロドム・シアヌーク・アンコール博物館」と
呼ばれる博物館を建設する事業にも協
力しました。館内にはバンテアイ・クデイ
寺院で発掘された274体の仏像等、数々
の発掘品が展示されています。2007
年11月2日に行われた開館式にはノロド
ム・シアヌーク国王陛下が出席しました。



アンコールワット西参道の修復作業

3 東京文化財研究所 タネイ寺院の石造物の 保存に関する共同調査

2006年12月、東京文化財研究所
とアプサラ当局は以降5年間の石造物の
保存プロジェクトに関する覚書に署名し
ました。

現地調査を経て、石造物に付着してい
る微生物の分類作業が完了し、34属41種
の地衣類(シアノバクテリアと緑藻類を含
む)が確認されました。コケ類には、8属
8科9種の蘚類、2属2科3種のスズマツ
ウ属がありました。



構造の組み立てに挑む



バイヨン寺院南経蔵の解体



微小気候データの計測

現在同研究所は、地衣類が石造物に及ぼす影響に関する調査、ならびに地衣類の種類を特定する調査の実施計画を策定しています。また、環境と微生物成長との相関関係の分析も、行われる予定です。

4 日本政府アンコール遺跡 救済チーム(JASA) 日本アプサラ保護プロジェクト (バイヨン寺院)

日本政府アンコール遺跡救済チームが、バイヨン寺院の北経蔵、アンコールワット寺院の北経蔵、スーブラ寺院(アンコールトム遺跡群)で行った調査・修復事業の経験を活かし、2004年、アンコールトムのバイヨン寺院における特定3箇所の修復作業を中心とする新規共同プロジェクトを発足させました。修復対象として指定されたのは、南経蔵、寺院の内回廊と外回廊の浅浮き彫り、中央塔群です。同プロジェクトは5年間(2005、2010年)のプロジェクトで、ユネスコ、JASSA、アプサラ当局という3団体が共同で行います。最重要目的は、バイヨン寺院の南経蔵の修復です。

考古学的な発掘調査を終えた2007年、上層部の解体作業が開始され、第2段階として、修復作業ができるように足場を組み作業が進められる予定です。

アンコールでの その他の保全・修復

1 クバルスピアのレリーフの修復

クバルスピアはアンコール公園の北東、シエムリアップの町から約47キロの地点に

ある考古学の遺跡で、11世紀から13世紀まで聖なる場所とされていた遺跡です。古代碑文に「千体のリンガの川」とあるように、全長200メートルの川床には千体のリンガが彫り込まれ、川岸にもレリーフが彫り込まれています。



レリーフの修復

2 アンコールワット寺院の バカンの木製階段

アンコールワットを訪れる観光客の数が日に日に増えるため、同寺院への危機圧力も高まっています。

2007年、アプサラ国家当局はアンコールワットの中心にあるバカン塔を当分の間閉鎖し、この部分を保護区域とする保存対策を実施



木製階段

しました。遺跡考古学部門Iは最近、バカン塔に2つの木製階段を取り付け、それぞれ上がり専用、下り専用としました。これは、古くなった階段の磨耗を防ぎ、観光客のアクセスを確保するためです。

3 チェコ共和国の石造建築物 修復プロジェクト(GOPURA)

2006年1月、アプサラ当局とチエコ共和国との間でGOPURAプロジェクトについての覚書が取り交わされました。プロジェクトの対象として明記されている遺跡の中から、ピミアナカス寺院(アンコールトム遺跡群)周辺で発掘されたライオンとゾウの彫像が、最初の修復対象物に選ばれました。

修復作業の後、GOPURAは彫像を寺院内で本来置かれていた場所に戻そうとしました。原位置はOlivier Curcio博士の調査で判明していたからです。しかしながら最終的には、壊れかけた彫像を発見・収集し、これをきれいに洗浄し、断片を描画して記録に残した後、安全のため、手の届かない木製の棚に保管することにしました。また、脚が1本しかない高さ180センチの

ライオンの彫像も修復の対象として選ばれました。アプサラの技術スタッフと協力してこの彫像の破片を接着剤で接着し、紛失した脚を砂岩で補い、ピミアナカス寺院の西階段の左側に据えました。

GOPURAはまた、アプサラ当局遺跡考古学部門Iに所属する技術スタッフを対象に石造物の修復や彫塑の断片の組み立て、工芸品の描画などに関する4つのトレーニング講座を企画しました。チェコ共和国の副大使はシエムリアップを公式に訪問し、同講座の内容や進捗状況について、現地で受講していたスタッフたちと話し合う機会を持ちました。



修復後のライオン像



ライオン像の断片の収集

Cultural Heritage News

「文化遺産ニュース」
パネル貸し出し
のご案内

文化遺産の写真パネルの貸し出しを行っています。



当事務所ではアジア・太平洋地域で撮影した数多くの文化遺産の写真パネル(カラー版、約90cm×60cm)を製作しています。文化遺産関係のイベントや会議での展示用として使用を希望される方に無料で貸し出しますので当事務所に御連絡ください。

「情報交流サロン」
のご案内

情報交流サロンを文化遺産や歴史の
学習、研究にご利用ください。

■AM9:30~PM5:00
(土、日、祝祭日、年末年始を除く)



当事務所内にある情報交流サロンには、日本を含む世界の文化遺産関係の書籍やパンフレット、ユネスコの世界遺産を紹介するビデオとDVD、当事務所が主催した国際シンポジウムなどの報告書をそろえています。

パンフレットはお持ち帰りいただけます。書籍やビデオテープ、DVDの貸し出しはしておりませんが、書籍を閲覧したり、32インチのディスプレイでビデオ、DVDをご覧いただけます。

サロンには、バーミヤーン大仏の破壊される以前の姿を記録した石窟全景のパネルも展示しています。



財団法人
ユネスコ・アジア文化センター
文化遺産保護協力事務所

Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

〒630-8113 奈良市法蓮町757(奈良県法蓮庁舎1階)

TEL 0742-20-5001

FAX 0742-20-5701

URL <http://www.nara.accu.or.jp>

E-mail nara@accu.or.jp

交通アクセス

- 近鉄奈良駅から ▶ 徒歩約20分
▶ バス13番のりばから「西大寺駅行き」または「航空白南隊行き」で、佐保小学校前下車すぐ
- JR奈良駅から ▶ 徒歩約25分
▶ バス7番のりばから「西大寺駅行き」または「航空白南隊行き」で、佐保小学校前下車すぐ

■次号の発行は、平成20年10月の予定です。